因陀羅網 Indra's net ～ 今、ここでコミューンを生きる

標的・圧殺・陵辱の地、沖縄・済州

田 恩伊 (チョン ウニ)

沖縄・辺野古

最近気付いたことがあります。沖縄の現状を語ったり描いているいろんな表現作業（映像、映画、本など）に使われている言葉にある種の共通性が見られるということです。「標的の村」、「圧殺の海」、「陵辱されるいのち」、、、。この凄まじい形容表現。

私は日本人は遠回しの言い方やさりげない言い回しが好きだと言う話しをよく聞いて来ました。ずばりと言ったり、ダイレクトに書いたりすると「きつい」「気難しい」人に見えたり、気苦しいと思うような文化的体質があるようで、こうしたことを何となく避けるような雰囲気を実際にも経験してきました。約２年前に研究関係の仕事で韓国の論文を翻訳して発表したことがありますが、こういう文化的な要素は論文にも現れていたようで、日本人の研究仲間たちには日本語に翻訳された韓国語の直接的な表現の仕方に「面白い」と言っていました。彼らが「面白い」とは言ったものの、実は「戸惑い」を表した表現だったと思います。（笑！）

しかし、この頃日本の社会に変化が起こっているからなんでしょうか。最近は結構ダイレクトな書き方や話し方を好む風潮が出てきているような気がします。過去は」変」な右翼や」現実離れ」した左翼の専有物のように思われていた生々しい表現や鋭く厳しい言い方を、今は大衆の前でずばりと話したり

●3・20 長野県御代田・あつもりホール↑

●3・29 東京四谷聖イグナチオ教会↑

書いている人たちが増えてきているように見えます。日本社会のどのような変化をあらわす現象なのか、ここで分析する事柄ではありませんが、確かに「遠回し・言い回し」という文化から「ダイレクト」の風潮へ少し方向転換をしているように見えます。いのちと関わる原発・放射能や憲法の問題、戦争に巻き込まれることと切り離しては語れない基地問題など、もう言い回しや遠回しで理解を求め、ゆっくりとその反応を待っていられる余裕なんかない社会になって来たからかも知れません。こうした環境をめぐる社会問題や政治問題などに一般の人々がダイレクトな発言をしたり、主義主張を訴えたり、誰もが解りやすい話し方や解放されるような行動力も出てきています。しかし、これもまた少し変なところに拡張しているようで、政治家の危険な発言やヘイト・スピーチ、レイシズムなども高まっていることから、「遠回し・言い回し」の控えめな姿勢を失った極端な現象も現れているような気もします。

ところが、こうした「遠回し・言い回し」の日本の文化とは違って、」同じ」日本でありながらも、猛烈な表現で自分たちの現状を伝えてきた」地域」があります。沖縄です。 沖縄のことを」地域」という言葉で表現したことに疑問や抵抗を覚える人がいるかも知れません。私が初めて沖縄を訪ねたのは 2012 年の６月。３泊４日間の滞在期間中、那覇、宜野湾市などを訪ね、沖縄でしか見つけられない本を探して「ジノン」という古本屋にも行ってきました。そして、沖縄に入った初日の夜、私はホテルの机に座って１日をまとめながら次のように始まる日記を書きました。

「琉球という国」に来ています。
日本の沖縄ではなく、「琉球という国」と呼んだ方が
この地に対する礼儀だと言うことをここに来て初めて気がつきました。
青い海と珊瑚の群落、王国の遺跡で贅沢をしてみたい
観光地として知られているこの地。私には「結い」と「泡盛」、
そして「米軍基地」として刻印されているところでした

つまり、私が書いた「地域」とは日本という国の「地域」でありながらも、なぜこれだけ言葉の使い方において文化が違うのか。これは私が沖縄を訪ねた時に綴ったこの文章にあらわれている感想にも通じるもので、同じ日本国でありながらもあまりにも大きな「認識のギャップ」を強調したい気持ちを意味します。また「地域」という言葉は実際、日本国の沖縄をも意味しています。私のような外国人のほとんどは「琉球」という国名は、韓国の済州がその昔「耽羅国」という王国であったように、日本国沖縄の昔の国名だという程度しか思っていません。

しかし王国としての「耽羅国」は 900 年代

●3・11 焼津・漁協魚市場会館↑

●3・24 東京三軒茶屋・カフェオハナ↓

に終わります。「琉球」という王国が事実上消えてしまうのは1879年、つまり近代に入ってからでした。約1世紀半も経ってないということです。独立国としての記憶や精神性、ある種のアイデンティティが未だに沖縄の人々の心に流れていることは言うまでもありません。1972年に行われた沖縄の復帰が、決して「琉球」の人々に「日本国・日本国民」としてのプライドを与えるものとして働いてこなかったことを、私は沖縄を訪ねて初めてそこに住んでいる人々の心の住処から強く感じました。そして、こうした意識と沖縄の現状が歯車のようにかみ合わずに問題として噴出して様子を、上に取り上げている「標的、圧殺、陵辱」という激しい言葉で赤裸々に表していると思います。今の日本社会で「本土」の人たちにとってこれだけの言葉を使わざるをえない場面や環境、条件などが果たしてあるだろうか、と考えてしまいました。言葉はその地の現実や現状を語るものだということがよく解ります。同じ日本国になっても「本土」と「しま」の文化をこれだけ遮ってしまう要因は一体何でしょうか。

済州・カンジョン

「クロンビ　風が吹く」という映画の日本自主上映会が無事に（実は盛況に）終わりました。上映を主催して下さった方や上映会に来て下さった方々にどのような形で無事終了のご挨拶を伝え、今後も繋がっていくか、今何らかの機会を設けようと考えています。実行委員会の事務局をつとめていた私たち3人（あぱっちさん、松村さん、私）は、上映会の終わり頃、金沢に応援に出向きました。そして、帰りの車の中でお互いに考えていたことや感想などを話し合いました。そこで、ふっと思いついて今後実行してみたいことが三つありました。「思いついた」という言葉

●3・28 東京高尾・オープンスペース ムミジカ↑

は相応しくないかもしれません。なぜならば、思いついたというよりは、約4ヶ月間上映のために話し合ってきた時間と約1ヶ月間続いた上映会の世話をし、現場を見ながらすでに私たちの心の中のどこかで同意し準備されていたことだと思います。

一つ、映画の上映会を主催して下さった方、そして参加してくださった方たちに声をかけて、一緒に済州・カンジョンに行ってみたいということです。さらに機会が与えられるなら、次はカンジョンの人たちと一緒に沖縄・辺野古にも行きたい。映画上映会の時に沢山の人たちがカンジョンの人たちを応援するためにカンパをしてくれたり、カンジョンのグッズや絵はがきなどを買ってくれました。現在カンジョンは「罰金爆弾」とも言われる大きな金額の罰金（3千万円以上）を抱えていて、村の公会堂とも言える村会館を売り払うべきかどうかを決めなければならない状況に追い込まれています。これは国が基地建設を反対していた村人や活動家たちを脅かすものとして課せられたものでした。罰金の総額に比べるとわずかな金額ではあり

●3・14　神戸学生青年センター↑

ますが、日本の自主上映会で集めてくださった皆さんの気持ちを是非一緒に伝えに行きたい。近い内に済州・カンジョン行きの声をかけますので、可能な方は是非手を挙げてください。これは、実行計画の第一番の優先順位です。

二つ、この映画の上映会が始まる直前に、私はカンジョンに行って来ました。その前にも3回ほど別の用事でカンジョンを訪ねたことはありましたが、映画上映会が始まる前に最近のカンジョンの様子と現状を自分の目で確かめておきたいということ、そしてカンジョンを支援する物販のためでした。この訪問で私が新しく出会ったのが「カンジョンの友達」と呼ばれる若者たちのグループがいるということでした。彼らはカンジョンの戦いを支えている活動家たちでもあります。彼らの多くは済州の外から来ていますが、最高裁判所の基地建設合憲の判決が下り、実質上基地建設を止められなくなってしまった現在でも済州を離れないでカンジョンや周辺に住んでいます。そして、深く傷つけられてしまったカンジョン村のコミュニティを回

●4・12 屋久島・やまびこ館←

復するために、様々な活動を行っています。私たちはこの済州・カンジョンに住み着いて活動している若者たちを日本で平和のために活動している様々なグループや人々と出会わせ、友達になれる機会をつくってみたい。まずは、辺野古や原発問題で頑張っているグループや集まり、集会・勉強会などに彼らが一人でも二人でも参加出来る機会をつくってみたいと思います。その後の広がりは「風」に任せればいいと思います。彼らと交流して行きたい方やグループ、若しくはいいアイディアを持っている方は是非手を挙げてください。

三つ、この3番目のことは少し時間がかかることでもあり、一人二人では実行できないことだと思いますが，三つの実行したい項目の中で一番画期的なことだと思います。それは、日本の「標的の村」や「圧殺の海」のような映画を韓国で自主上映してみたいということです。もちろん「クロンビ、風が吹く」がそうであったように韓国語の字幕などすべての作業を皆の力を集めて手作りでやりたい。「平和」を生きる力を身につけるためには、まず私たちが共にすることが楽しく有意義であることを体験する必要がある。そこに、堂々と「平和」を生きる力が息づきます。重要なのは特定の「力」に依存することなく、自分たちの足元の大地に深く根付いて倒れないルーツを下ろしていく人々、若者、子供たち、家族、村、地域だと思います。そのためには、自分たちが抱えている問題や事情、場所（空間）と人々を相手のところと入れ替えながら、お互いの現状を具体的に理解し合う必要があります。人々はこれを「交流」と言います。（笑）今こそ「標的・圧殺・陵辱の地、沖縄・済州」を歴史の一部として終わらせなければならない時期に来ていると思います。「一緒」にその準備を着々と進めながら歩んでいきたい。

●3・18 長野・プリコ↑